ハイスクールD×D IF

tyta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハイスクールＤ×Ｄ　ＩＦ

【Ｎコード】
Ｎ９６５５Ｙ

【作者名】
ｔｙｔａ

【あらすじ】
４年前悪魔、天使、堕天使の中で人を殺したりするものが首を切られて殺される事件が多発していた。各勢力は犯人を探すも結局見つからずにその犯人は姿を消した。　そして現在とある公園から犯人の所持していた神器の反応が出現した。その現場に向かった悪魔のリアス・グレモリーは自分と同じ学校の制服を着る青年が堕天使と戦ってるのを目撃する。

プロローグ（前書き）

この作品はハイスクールＤ×Ｄの一誠の性格改変であり、一誠は悪魔ではありません。

プロローグ

４年前
とある屋敷のある部屋でひと組の男女がいた。女性のほうは銀髪のメイドで男のほうは赤髪の美男子であった。

「サーゼクス様、Ｓ級はぐれ悪魔が討伐されたようです」

「そうか、それで倒したのは誰だ？」

「それが、わからないんです」

「わからない？　どういうことだ」

「反応があってすぐにそこの領主と眷属の者が向かったのですが、現場に着いた時にはすでに首を切られて消滅しかけていたそうです」

「現場までの時間は？」

「およそ５分です」

「５分でＳ級を倒すとは」

そう言ってサーゼクスと呼ばれた男は考える。そんなことができるのは上級悪魔でもかなり少ない。堕天使でも幹部ぐらいしかいないだろう。
そんなことを考えてる扉を壊さんばかりの勢いで誰かが入ってきた。

「失礼します！！　サーゼクス様、先ほどS級はぐれ悪魔が狩られた領地で更に3体のはぐれ悪魔が狩られました！！」

「「！！」」

「彼らをやった犯人は分かりませんでしたが犯人は神器（セイクリッド・ギア）を所持していたそうです。」

「神器の持ち主か…そこまで強力な神器だと神滅具（ロンギヌス）かもしれないな」

「どうしますか？」

「とりあえず犯人の目的が分からないから周辺地域の悪魔に警戒させよう」

そう言って彼らが部屋を出ようとすると部屋の机の電話が鳴った。

「こちらサーゼクス・ルシファー、…それは本当か？　分かった今すぐ魔王全てを緊急招集させる」

そう言って電話を置くと彼は言った。

「エクソシストのフリード・セルゼンという者が任務先で神器所持者に首をはねられて死亡したらしい」

「「！！」」

「彼は悪魔を退治に来て悪魔とその悪魔の依頼主を殺害したそうだ。そして任務完了の報告中に『一般人』に見られたから始末するといって連絡を切り教会の派遣した者が現場に行った時には首をはねら

れていたらしい」

「フリード・セルゼンと言えば近い内に協会から除名される予定の人物でしたね、なんでも関係のない一般人を殺害したりと神に仕えるにふさわしくない行為をしたとかで」

「そして堕天使側でも人間を殺してた堕天使数名が首を刎ねられ殺されていたようだ」

そう言ってサーゼクスは部屋を出て行く。

「今すぐ全悪魔に警戒態勢を取らせよう。それと他の勢力にも協力体制を申し込まなくてはだな」

その後の調査で分かったことは被害にあった悪魔やエクソシストや堕天使は全て人間に害をもたらしていたものであること、犯人は少年であること、神器は鋭い刃であるが剣などではないということ、そして事件の起こるのは夜だけでとある悪魔の領地から半径２ｋｍ以内だということが分かったが一向に犯人は見つからなかった。

そして１年が過ぎたころにその事件は急に止まった。他の勢力も捜査を続けたが犯人は見つからなかった。

そして現在とある悪魔の領地で再びその神器の反応がでた。その現場に向かうのは赤い髪をした女性、そして彼女が現場に着いた時に見たのは堕天使と対峙する一人の少年だった。

出会い

兵藤一誠、それが俺の名前だ。特に目立った特徴もなく、休み時間には親友である松田と元浜と木場と一緒に他愛もない話をしたりゲームをしたりして普通に過ごしていた。
しかし今日俺は後輩の女の子に告白された！！　特に目立った特徴もない俺に彼女ができたのだ。それを聞いた俺の親友の３人は

「イッセー！！　お前どんな裏技を使ったんだ！？」

「そうだぞイッセー！！　隠してないで俺たちにも教えろ！！」

「おめでとう、イッセーくんにもようやく春が来たんだね」

と松田と元浜は俺が告白されたのが信じられないらしく俺に詰め寄ってきて、木場は俺のことを素直に喜んでくれた。
そして付き合ってから初めてのデートの日

思えばこの日が俺の平和な日常の終わりだったのかもしれない

？？？ｓｉｄｅ

今日でこの退屈な日常も終わる。何で私がこんななんの特徴もない奴なんかと付き合ってるふりなんかしなきゃいけないのよ。
デートのコースにしたって普通すぎるし、やることなすことすべてが普通の奴。此処まで特徴がないと逆にすごいと思えるわね。
でもそんな日常も今日でおしまい。私はこいつを殺して、計画を進めるとしましょう。

「イッセーくん、ちょっと見せたいところがあるんだけど一緒に行ってくれない？」

さて後はあの結界を張っておいた公園へこいつを連れてって殺すだけだ。

？？？ｓｉｄｅｏｕｔ

リアスｓｉｄｅ

私はリアス・グレモリー、この一帯の領主としてやってきた悪魔である。

今日も私の活動拠点であるオカルト研究部へ来たらいつもは遅くまで来ないはずの私の下僕の三人の男性悪魔がやってきた。

「あら、今日は早いのね」

「今日はあいつが居ないから教室に居る意味もないしな」

「くっ、デートなんてうらやましい！　もてる奴なんか全員死んでしまえばいいのに」

「まあまあ、そんなこと言わないで喜んであげようよ」

そう言いてソファーに座って三人は親友の事について話している。

「それより良かったの？　彼と付き合ってる彼女堕天使なんでしょ？」

私がそう言うと眼鏡をかけてる方が反応する

「そうでしたね。解析したら堕天使だったから警戒してたけどなんにもおかしいところもないしこいつの能力で今も観察しているから万が一はないでしょ」

「そうですよ。今何か手を組んで公園に入っていっ…結界が張られてる公園に入った」

その瞬間彼らは立ちあがった

「場所は！！」

「ここから全力で十分の所！！」

そう言って部室を出ようとした時私の持ってた携帯が鳴り響いた。そしてこの音は

「第一級警戒対象出現！！　場所は…！！　此処から全力で十分の公園！！」

「「「！！」」」

「すぐに転位用の魔方陣を用意するから他の下僕も集めてきて！！」

「「「了解！！」」」

そう言って三人はすぐさま走り去る。さて、私も急いで用意をしなくては！！

リアスｓｉｄｅｏｕｔ

イッセーside

俺の彼女である天野夕麻ちゃんがデートの最後に機体と言った場所は公園であった

「ねぇ、イッセーくん」

「なんだい、夕麻ちゃん」

「私達の記念すべき初デートって事で、ひとつ、私のお願い聞いてくれる？」

「うん、俺に出来ることならね」

「死んでくれないかな」

「別にいいよ」

俺が即答すると、彼女は眼を見開いた

「ただし」

そして俺は手を振り上げた

「その前に君が死ななかったらね」

そう言って俺は手を振り降ろした

イッセーsideout

夕麻ｓｉｄｅ

一体何が起こったのだろう。私はこの公園で彼を殺そうと思って連れてきて、彼が驚いている間に殺そうとしたしたのだけど彼は私の発言に即答でＯＫを出し驚いてる私の前で手を挙げてから振り下ろした。

そして

「きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

次の瞬間私の右腕が切断されて血が溢れだす

「あれ？　避けられちゃったか。今ので真っ二つのする予定だったんだけどな」

彼がニコニコしながらそう言った

「ど…どうして…」

「ん？　それはどうして君に攻撃したのかってことかな、堕天使レイナーレさん」

その瞬間私は凍りついた。何故私の名前がこいつに知られてる？

何故一般人のこいつが私達の存在を知っているの？

そう考えてる内に彼はまた手を振る。私は急いで翼を出現させ空へ逃げる

「さて、いろいろと騒ぎになる前に終わらせるか」

そう言って彼は構える。私も止血をし光の槍を出現させてそれを構える。そしてお互いに動こうとした瞬間公園の端に魔方陣が出現した。それを見て彼が舌打ちしながら構えを変える右腕を前に突き出し何かを唱え始めたようだ。
そして、魔方陣から悪魔たちが６人出てきた

夕麻ｓｉｄｅｏｕｔ

リアスｓｉｄｅ

魔方陣の準備ができた。下僕も全員集まった

「皆、すぐ行くわよ」

そして魔方陣に全員が折ったことを確認した私達がすぐさま目的地の公園へと飛ぶと片腕の堕天使と私の学校の制服を着た男子生徒が向かい合い臨戦態勢を取っていた

「ごきげんよう、堕天使レイナーレ、及び第一級警戒対象認定者」

「……グレモリー一族の娘か……」

「はじめまして、私はリアス・グレモリー、グレモリー家の次期党首よ」

「今はあなたなんかにかまっている時間はない」

そう言ってる間も彼女は目の前の人物に集中していた

「彼がイッセーくん？」

私が後ろに居る者に質問をするが返事がない。不思議に思って後ろを向くとそこには私を除く全員が気絶していた。

「今俺の姿を見られるのは困るから眠ってもらったぜ」

そう言ったのはレイナーレの前に居る彼だった

「まだ、ちょっとばかり早い、この街の堕天使達が居なくなるまではそいつらに見られたくないからな」

そう言うと彼はレイナーレに対して手をふるう。レイナーレは急いで光の槍を投げるがその槍は真っ二つになり消えてしまった

「そう言う訳ですぐに死んでくれ」

そう言って彼がもう一度手を振った瞬間レイナーレの首が切られて地面に落ちた

イッセーの頼み事（前書き）

だいぶ間隔が開いたけど

イッセーの頼み事

堕天使ドーナシークとその仲間であるカラワーナ、ミッテルトは、自分達に計画を持ちかけてきたレイナーレの消滅の報告を聞き焦っていた

彼らはとある神器をレイナーレが手に入れることを手伝う代わりに自分達の地位を上げてもらうことを条件として手伝っていたのだ

しかも相手は４年前に堕天使やはぐれ悪魔、更には悪魔祓い魔でも次々に殺し最後まで正体すら分からなかった神器所有者である

「やばいぞ、このままだと俺たちまでやられる」

カラワーナがそう呟いた。彼らは本来ならこの街に居るべきではない存在であったが今回レイナーレの計画に乗ってこの街に上の方に黙ってやって来ていた

「だが、あの神器所有者なら上の方もこっちに来るんじゃないのか」

「そうだな。総督は奴にかなり興味を持っていたからな、そのまま総督が出てくるんじゃないか」

「まさかそこまでしないだろ」

そう言った時彼らの張っていた結界が壊された

「な、何が起こった！！」

「この感じは…まさか」

「そのまさかだよ」

彼らが入り口を向くとそこに居たのは

「面白い事をやってるようだな、おまえら」

「そ、総督…何故此処に」

「例の神器所有者が出たって言うから来たのさ。それに勝手なことをしようとした部下の制裁もしなきゃだしな」

そう言って彼は翼を広げる

「じゃ、始めるか」

そのまま彼は3人の方絵と歩み寄って行った

その夜住宅街にある一軒の空き家が突如燃え上がったというニュースが放送された

公園

リアス・グレモリーは目の前の人物に警戒を続けていた。自分の眷属である5人が何の抵抗もさせず気絶させた人物、そして4年前に大量のはぐれ悪魔を狩った人物を

そして彼は今目の前に居る堕天使を葬り去った後こちらの方を向いて

「そんなに警戒しなくっても大丈夫ですよ、こっちはあと少し正体を隠しただけなんですから」

「そう簡単に信じられるわけないでしょ」

「ですよね。ま、こっちの用件だけ言わせてもらいます」

そう言って彼はズボンのポケットから一通の手紙を出した

「それをサーゼクスに渡して欲しいだけですよ」

「何故お兄様の名前を…」

「お兄様？　ああ、そう言えば魔王は死んでいたんだっけ」

「そこまで知っているのね」

「とりあえずそれを渡しておいてください、こっちはもう一人のお客様が来るのですぐに帰らなくてはいけないんで」

「待ちなさい！！　私がそう簡単に逃がすと思ってるの」

「はい、俺の方があなたより強いですから」

「言ってくれるわね。なら今こk『相棒、客がついた様だぞ』『イッセー、お客さん来た』…ッ！！」

「分かったよドライグ、マリィ、行こう」

そう言うと一誠はその場から去って行った。リアスはその後ろ姿

を見ていることしかできなかった
そして彼が見えなくなると警戒を解いた
「今の声は一体…」
その疑問を考えるのをやめて彼女は眷属を起こし始めた

イッセーの家

イッセーが玄関まで行くと一人の男が立っていた
「お前は…」
「やあ、久しぶり」
そう言ったのは彼と一つか二つしか違わない人物だった
「それで返事は？」
「その話なら3年前に断っただろ」
「あの時と変わらずか」
「ああ、なんならまたやるか？」
「いや、今の君に勝てる気はしない」
そう言うと彼は魔方陣を展開し

「僕はまた君に挑戦しに来る。それまでに負けるようなことがないようにしてくれよ」

そう言い残して消えてしまった

「相変わらず勝手なことを言ってくれるな」

そう呟きイッセーは家へと入った

そしてそこに居たのは

「遅かったから勝手に入らせてもらったぞ」

本当の客アザゼルが居た

アザゼル

「久しぶりだな、アザゼル」

俺は勝手に家に上がっていた人物にあいさつをする

「そうだな2年ぶりか」

こいつはアザゼル、堕天使の総督である

「それで今回俺を呼んだ理由は何だ？　もしかしてその神器を解析させてくれる気になったのか？」

「違うって、そろそろ各勢力に俺の正体を明かすことにする」

「ようやく表に出てくるのか」

「ああ、とりあえず悪魔のリアス・グレモリーに魔王たちへの手紙を持たせておいた」

「そうか、天界の方は？」

「すでに呼んである、とりあえず5日後の夕方に各勢力にこの街に来てもらう」

「それに俺も参加しろと？」

「ああ、とりあえず護衛は付けておけよ」

俺はそう言って話を終わらせようとする

「イッセー」

「？　何だ？」

「お前が表に出るってことはあいつが動いたと見ていいのか？」

「……ああ、曹操が動き出した」

「……となるとヴァーリも動くな」

「…ああ、俺は準備を進めさせてもらう」

「分かった。無理だけはするなよ」

そう言うとアザゼルは俺の家から出て行き魔方陣を展開させて転移した

「さて、俺も準備をするか」

そう言って俺は自分の部屋へと移動する

そしてそこに魔方陣を書いてある紙を置き魔物の住処となっている森へと移動する

「今日使った分とこれから必要になる分は狩っていくぞ」

そしてその森に居る魔物の半分がこの日消滅させられた

翌日

イッセーが学校に行くと松田と元浜そして木場がイッセーのもとへとやってきた

「ようイッセー、おはよう」

「おはよう、イッセー」

「イッセーくん、おはよう」

「おはよう、木場と……松田、元浜」

「ちょっと待て、さっきの間は何だ！？」

「別に存在を記憶から消していたわけではないぞ」

「消してたんだな！？　消してたんだろ！？」

「朝からテンション高いね」

「「お前のせいだろ！！」」

何時も通りの日常がそこにはあった。そしていつも通り授業があり、何時も通り放課後そんな一日が待っていた

放課後になりイッセーはすぐに家に帰った。それを3人は見送ってから部室へ向かう

「どうだった」

部室へ向かう途中で木場は元浜へと質問する

「ダメだった、解析をしてもエラーばかりでてきやがる」
「お前の駄目だったか、俺も魔術で調べてみたが反応が全くなかった」
「君達でも駄目だったなら彼が今まで見つからなかったことも分かるけど、あれは本当に彼だったのかな？」
彼らは気絶していただけなので直接彼を見てはいない
「だけどあいつが調べられないってことは何らかの力が働いてるってことだしな」
「それに気になるのはあの手紙だな」
「ああ、何故魔王様の名前を知っていたかとかは置いとくとして４日後に天界と堕天使の両方の勢力のトップたちそして魔王様にこの街に来て欲しいってあいつ何を考えてるんだ？」
「とりあえず僕らもその時に集まることになってるからその時に分かると思うけど」
「そうだなちょっと不安だな」
そんな話ウィしながら彼らは部室へと歩いて行った

会談とイッセーの戦力

イッセーが手紙を託して5日目になった。その日の夜駒王学園の校庭には各勢力が集っていた

堕天使は中枢組織である『神の子を見張る者』から総督であるアザゼルの他副総督のシェムハザ幹部のアルマロス、バラキエル、タミエル、コカビエルそして現在の白龍皇ヴァーリの7人

天使は『熾天使』からミカエル、ラファエル、ガブリエル、ウリエルそして教会側より4人の悪魔祓いの8人

そして悪魔はサーゼクス・ルシファー、セラフォルー・レヴィアタン、アジュカ・ベルゼブブ、ファルビウム・アスモデウスそしてサーゼクスの女王であるグレイフィア・ルキフグスそしてリアス・グレモリーとその眷属達の11人であった

「何か俺ら場違いだと思うんですが」

「此処は部長の管轄だから俺たちが居なきゃって言われたけれど」

「正直これは僕もつらいかな」

木場と元浜と松田は呟いていた。天使と堕天使そして悪魔たちのトップは睨み合ったまま動かない

「皆さん揃ってますね」

そう言って姿を現したのは駒王学園の制服を着た一人の生徒であった

「遅くなってすいません、それではまず自己紹介と行きますか」

そう言ってイッセーはトップの3人の前へと行く

「俺の名前は兵藤一誠、４年前はぐれ悪魔達を狩ってたものだ」

イッセーがそう言うと悪魔側から質問が来た

「君はなぜはぐれ悪魔を討伐していた」

「俺は４年前はぐれ悪魔に襲われた」

その言葉に全員が驚く

「その時に俺の両親は殺された。その報告はそっちにも行ってるだろ？」

「ああ、3人家族の内2人の亡骸が確認されているが息子が一人行方不明になっていた」

「その息子って言うのが俺さ、とりあえずそんな事があったから俺ははぐれ悪魔を狩っていた」

「ならうちの悪魔祓いやそっちの堕天使が狩られたのは何故だ？」

「それは「俺たちの所でかられた奴は人間に害を与えてた奴そしてそっちの方でかられた奴は同じく人間に害を与えた者もしくは非人道的な実験をしていた者だ」…アザゼル、いつも言うが俺の喋ってる時に喋るな」

「アザゼル、君は彼と知り合いなのかい？」

「そうだ。俺はある組織を追ってる時にこいつと出会ったそれから1年位は一緒に行動していたからな」

「そのことについては後で後で話すとして今回集まってもらった本題に入るとしよう」

「そうだね。とりあえず聞こうか」

「今回俺とアザゼルはこの三勢力間で和平をしたいと思っている」

「「「!?」」」

その場に居た勢力の全員が驚いた。この三勢力は大昔から争いを繰り広げてきたのだ。それをいきなり和平がしたいと言ってきたのである

しかもその提案は目の前に居る少年だけではなく堕天使の総督までもが望んでいるというのである

「和平に関しては我々の方も参加ですがなぜ急にそんな事を…」

「それは…!!」

イッセーが何かを言おうとした瞬間コカビエルが光の槍を投げてきた

「和平だと? 俺たちがこんな奴らと手を組むとかふざけるんじゃない!! 俺は戦争がしたいんだよ戦争さえできればだれがトップだろうと構わない」

そう言って投げられた光の槍はイッセーに向かって飛んでいくがそれはイッセーの前に現れた巨大な魔物に阻まれた

「「「なっ！！」」」

それは蛇であった。その目を見た者は死ぬと言われている伝説の様の生き物

「バジリスク」

そして動きの止まったコカビエルの基に更にもう一体蛇の様な魔物が現れる。こちらの方は首が８本もある巨大な蛇

「八岐大蛇」

そしてそれと一緒に現れたのは体に炎を纏った鳥

「フェニックス」

その他にも大量の魔物が居る

「な、なんでこんなところにこんなに魔物が」

「こいつがイッセーの戦力の一部だ」

驚く各勢力にアザゼルが答える

「イッセーは不思議と魔物に好かれるらしくってな、その魔物たちがこいつらだ」

そしてイッセーは動きを止めているコカビエルのもとへと行くと

「お前にチャンスをやろう」

「チャンスだと？」

「ああ、俺と戦って勝つことができたら此処から逃がしてやるよ」

「下等種がほざいてるんじゃね！！」

そう言うとコカビエルは凄い速度で突っ込んでいく。しかしイッセーはそれを見ても焦りもしない

そして

「その程度か…ドライグ」

『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！！！！！！！！』

イッセーの左腕に赤い籠手が出現しそこから光が溢れイッセーを包むとその次の瞬間コカビエルは地面へと落ちていた

「な、何が…起きた…」

攻撃を受けたコカビエル自身も何が起きたのか分からないうちに地面に落されさっきまでイッセーが居た場所には赤い鎧を纏ったイッセーが剣を構えて立っていた

「その姿は…そうか君が今の赤龍帝だったのか」

赤龍帝と禍の渦と罪姫

会談の場は静まり返った。１０枚の羽根をもつ堕天使の幹部が瞬殺されたからではない
その瞬殺したものが赤い龍の様な鎧を着ていたことに驚いていたのである

「君が今回の赤龍帝だったのか」

「そうだ俺が現赤龍帝だ」

「そしてその剣は魔剣だね」

「正解です。これは俺のコレクションの一つである魔剣レーヴァテインです」

イッセーはそう言うと剣を消し鎧を解除すると地面に倒れてるコカビエル近づく

「それでこいつはどうする？　殺していいか」

そう言ってイッセーが動けないコカビエルに手を伸ばすとその手を誰かが止める

「駄目だ、イッセー。そいつの処分はこっちでやる」

腕を止めたのはアザゼルであった。イッセーは不満そうな顔をしているが諦めたように手を引っ込める

「まぁいい、その代わりアザゼル代わりの物を寄越せよ」
「今度な」
そう言うとアザゼルはコカビエルを自分の研究所に転送する
「アザゼル」
コカビエルを転送したアザゼルにサーゼクスが聞いた
「君は何を企んでる」
それに続けるようにミカエルが言う
「君が神器所有者を集めてることは知っているがそれで何をしようとしている」
「俺たちは来るべき戦いに備えているんだよ」
「そしてそいつらはついに動き出そうとしている」
「そいつらの戦力は強大だからな」
「俺たちだけじゃ確実に負ける」
「だからこそ俺とイッセーは和平を結ぼうとしているんだ」
イッセーとアザゼルが答える
「その敵とは？」

「『禍の団（カオス・ブリーゲード）』目的は破壊と混乱」

「そして組織のトップに居るのが神が恐れた龍」

「「『無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）』オーフェンス」」

「「「！？」」」

会場全体が驚愕に包まれる。そんな中アザゼルは一人の人物に顔を向ける

「そうだよな、ヴァーリ」

「そうだ。オーフェンスが俺たちのトップだ」

ヴァーリがそう言うとその背中から白い翼が生える

『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！！！！！！！！』

そして瞬時に白い鎧を纏うとその周りに大量の魔方陣が出現する

「そして俺の今回の任務はこの会談に出てる主要人物の抹殺もしくは」

そこで一回言葉を切るとイッセーを指差し

「兵藤一誠をオーフェンスの許へと連れて行くことだ」

魔方陣が完璧に展開しそこからたくさんの魔術師や悪魔、堕天使などが出てきた

「俺はこの間も断ってるはずだがまだ諦めてないのか」

イッセーはその言葉を聞いた瞬間あきれたような溜息をつく

そうこうしている間に両陣営とも戦う準備が完了していた

「さぁ、戦争の開始だ」

ヴァーリがそう言った瞬間魔術師たちが一斉に術を発動しようとする

それを見て各陣営が迎え撃つための攻撃を始めようとするがそんな中イッセーは他のものより一歩前に出るとアザゼルに呼びかける

「こいつら全部貰っていいか？」

その言葉の意味を理解したアザゼルは一言だけ呟く

「好きにしろ」

その言葉を聞いた瞬間イッセーの右の二の腕から無骨で長大な黒い刃が生える。そして魔術師たちが術を発動しその全てがイッセーに迫るがイッセーはそれを全て切り裂いた

まさか一発も当たらないとは思ってなかった魔術師たちの動きが止まった瞬間イッセーは詠唱を開始する

Die Sonne toent nach alter Weise In Bruedersphaeren Wettegesang.

日は古より変わらず星と競い
Und ihre vorgeschriebne Reise
Vollendet sie mit Donnergang.
定められた道を雷鳴の如く疾走する
Und schnell und begreif
lich schnell
そして速く 何より速く
In ewig schnellm Sphae
renlauf.
永劫の円環を駆け抜けよう
Da flammt ein blitzende
s Verheeren
光となって破壊しろ
Dem Pfade vor des Donne
rschlags;
その一撃で燃やしつくせ
Da keiner dich ergruenden mag,
Und alle deinen hohen Werke
そは誰も知らず 届かぬ 至高の創造
Sind herrlich wie am e
rsten Tag.
我が渇望こそが原初の荘厳
Briah——
創造
Eine Faust ouvert?
re
美麗刹那・序曲
そして詠唱が終わった瞬間イッセーの腕の刃が赤く輝き…魔術師

たち全員の首が飛んだ

「なっ！！」

それは一瞬であった１００人近くいた魔術師たちは全員首をはねらヴァーリの喉にも刃があてられている

「後はお前だけだ」

そう言うイッセーの顔にはまだ余裕が見られるがヴァーリはそうはいかない

今回ここへ連れてきた魔術師はヴァーリが認める強者ばかりであった。それがたったひとりの人間に瞬殺されてしまったのだから驚くしかない

「結構力が上がってるじゃんかイッセー」

その中でもアザゼルだけは驚いていなかった

「あれも彼の神器かい」

「そうあれがイッセーの持つ２つ目の神器『罪姫・正義の柱（マルグリット・ボワ・ジュスティス）』だ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9655y/

ハイスクールD×D IF

2012年1月14日00時51分発行